

生きるとは何なのでしょう。私たちは何を目的に生きているのでしょうか。

### 1. 祈りと御霊の助けで (1章19節)

- ①今からも喜ぶ (18節末尾) パウロはどんな動機で語られたことであれ、キリストが宣べ伝えられたことを喜びました。本物かどうかを突き詰めれば、本当に純粋な動機で行なうことはありえないとも考えていたかもしれません。獄中であって、なんであれキリストが伝えられることを彼は喜んでいました。
- ②祈りと御霊の助けにより (19節) パウロに喜びをもたらすもの一つにはピリピの教会の祈りにありました。ピリピの教会の人々はパウロのために熱心に祈ったのでありましょう。それがパウロにも伝わってきました。二つめには、イエス・キリストの御霊(ここに三位一体なる神の一端の告白があります)の助けがあります。こんなに心強い助けはありません。
- ③私の救いとなる (19節) 主にあって喜ぶことは、主の助けによって与えられる中核にある「私の救い」となるというのです。ここでの救いとは、魂の解放、霊的健康であったりするのです。たとえ獄中であって、パウロは恵みをいただく道を知っていました。それが主から来るものであることも知っていました。

### 2. キリストがあがめられ (1章20節)

- ①切なる祈りと願いにかなう (20節) パウロは大変な祈りの人でした。絶えず祈る姿勢をもって生き、賛美し、感謝し、悔い改め、求めつつ、とりなしをしていました。その祈りは自分の罪についての厳しい分析に裏打ちされた、徹底的な神の恵みの神学に基づいていました。そのパウロが、「私の切なる祈りと願いにかなっている」というのですから、かなり価値を置いていたといつて良いでしょう。
- ②恥じることなく (20節) 新改訳や口語訳は「恥じることなく」とあり、新共同訳は「恥をかかずに」とあり大分ニュアンスが違ってきます。「恥じることなく」には、人の言葉や行動に左右されて確信を失ってしまうようなことなく大胆に、といった意味合いがあるとすると、「恥をかかずに」には日本の文化や言葉からすれば、沽券を傷つけられて恥ずかしい思いをすることなく、といった内容が浮かぶでしょうか。共通している意味は「確信をもって」というあたりでしょうか。
- ③キリストがあがめられる (20節) いつもキリストのことを思い、大胆にその福音を語りつづけていくことがパウロの基本方針でした。そして、「生きるにしても、死ぬにしても」、パウロという存在を通してキリストがあがめられていくことを彼は願っていたのです。私たちはどこまで言っても罪人です。「神の命によってなされた、最善の行為といえども神の赦しをこわねばならない」と改革者ルターは言いました。人間はあがめられる存在ではありません。キリストのみがあがめられることをパウロは願っていたのです。

### 3. 生きることはキリスト (1章21節)

- ①生きる (21節) 誰であっても、生きている限り、一度も死ぬことなくここまで来たのです。必要な食物も与えられて生きてきたのです。住む家があって布団があって眠ることもできます。お風呂に入ることもでき、服もあります。感謝です。あなたにとって生きる上で無くてならないものは何ですか。「無くてはならないものは多くはない。いや一つだけである」(ルカ10:42)と主イエスは言われました。
- ②生きることはキリスト (21節) パウロは「生きることはキリスト」と明言します。キリストをいつも思い、キリストの教えを心に刻み、キリストの十字架と復活を覚えつつ、そのご愛をかみしめつつ、祈りつつ歩むということか。金太郎飴はどこを切っても金太郎が出てくるように、パウロは彼の存在のどこを切ってもキリストが表れてくることを願ったのでありましょう。
- ③死ぬことも益です (21節) 元の言葉では「死ぬことは得ることである」とあります。それでは何を得るのでしょうか。キリストを得るということでしょう。キリストとなんの隔たりもなくともにある。永遠に神をほめたたえ、もはや死もなく、苦しみも、悩みもない、完全な平和をいただくのです。

《結論》 黒澤明監督に「生きる」という映画がありました。市役所の課長であった男は胃癌であることがわかり生きる希望を失い、種々の享樂をして苦しみから逃れようとしても満足できません。彼は、市民の言うことなど聞かない役人でしたが、その声を聞いて公園を作り喜ばれます。彼は公園のブランコに揺られながら、息を引き取るのです。「生きる」にあたって、何が大事であるかということを考えさせてくれます。

パウロは常に究極を生きた人です。そして、究極的な喜びを受け取りながら生きました。人は追い込まれた時に究極のことを考えます。しかし、「喉もと過ぎれば熱さを忘れ」がちです。パウロをして「生きることはキリスト」と言わせたのは何でしょうか。①パウロはクリスチャンを迫害する立場から、キリストに出会い回心した人(使徒9章)ですから深い救いの確信がありました。②献身してキリストを宣教したのでさらに確信が強まったでしょう。③生活習慣の中に祈りや御言葉に親しむサイクルがありました。ですから、パウロにとっては生きることはキリストそのものだったのです。少なくとも、キリストはともに歩いてくださる主です。個人的応援をしてくださる主です。生きることはキリストと告白する日が来ますように。